

家族アドボカシーから マクロ・ソーシャルワークへの展開

ソーシャルワークにおけるアドボカシー機能を捉える

The Gradual Shift from Family Advocacy to Macro Social Work
How Social Workers see their Role as Advocates

出 村 和 子

Kazuko Demura

序章 問題提起——

新たな21世紀の幕開けを前にして、この過去20世紀におけるソーシャルワークの歴史を振り返ると、時代の変化と共に目覚ましい展開があったことは言うまでもない。ロバーツとニー（Robert W. Roberts & Robert H. Nee）がすでに指摘しているように、ソーシャルワークは20世紀の申し子であり、新しい専門職業としていろいろな実践領域の専門のなかから生まれてきたのであるが¹⁾、この20世紀の100年間に、ソーシャルワークの機能はどのように展開してきたのだろうか。

ちょうど、1930年代から1940年代に突入しようとした時期に、グレース・コイル（Grace L. Coyle）は「転換期の社会事業（Social Work at the Turn of the Decade）」と題して、ソーシャルワークの誕生から30年代に至るまでを振り返り、40年代を前に、ソーシャルワークは何を目指して進むべきかを提起している。「……私たちは個々のクライアントに対しても、または素人としても責任があるばかりか、わたしたちはまた社会の偉大な社会的諸力のダイナミックな相互作用に、私達は望むと否とにかかわらず、ある役割を受け持たねばならないだろう。それゆえ私たちは望ましい方向に向かって、賢明な見通しをもって、私たちの力を用いるために、それらのもつ意味を把握することは重要である。……」と述べ、その新たな展開の中で再認識されたことは、社会問題に対して地域社会が責任を負うという、社会責任であり、もう一つは社会的原因によって起こる災害は、社会的に救済されねばならないという、権利と公的責

任ということを強調している。²⁾

当時はもちろん千年紀末から新たな世紀に移ろうとする現在とは異なる社会事情に置かれていた。1930年代は特に、大恐慌で始まり、もっとも大きな戦争の開始によって終結した。その間大量の失業と低所得者たちの問題があり、その10年が幕を閉じたとき、ヨーロッパでは戦火による破壊が始まり、危機的な状況に突入したのである。そのことは当時のソーシャルワーカーに大きなインパクトを与え、コイルは「……社会事業家として私たちは、一体どんな役割を演ずることができるであろうか」と問いを投げかけている。そして、クライアントに対して、地域社会に対して、さらに、より大きな社会的場面に対して働きかける必要性と重要性とを力説している。³⁾つまり、危機的な社会情勢の中で、ソーシャルワーカーはミクロからマクロの領域まで関わることへの努力を説いたのである。

本稿では、そうしたソーシャルワークの機能と役割を以下の観点から検討したい。すなわち、家族を対象とする家族ソーシャルワークの独自性と今日のマクロ・ソーシャルワークへの発展のプロセスを、家族ソーシャルワークの新たな実践となった、アドボカシーの概念から、その活動舞台となっているアメリカの場面に限定して、検討してみたい。なぜなら、今日のソーシャルワークの展開は実にアメリカでの実践に負うところが多いからである。本稿は Part I として、ソーシャルワークのアドボカシー機能がどのように捉えられてきたのか、家族を対象とする家族ソーシャルワークに焦点を当て、ソーシャルワーカー自身が、

その役割をどのように見ているかを中心に、特に1990年代に行われた実態調査研究を紹介しながらその流れを追う。さらに、Part IIでは、アドボカシー機能が、今日のマクロ・ソーシャルワークと呼ばれる専門分野にどう引き継がれたかを検討する。紙数の都合上、Part IIは次回に譲りたい。

第1章 揺らぐ家族ソーシャルワークの独自性

ソーシャルワークの初期から家族はその中心的課題であり、ソーシャルワーカーが家族を対象に実践することは、この専門職の発生と同じくらい古い歴史を有している。例えば、メリー・リッチモンド(1917)やパーサ・レイノールド(1938)のような初期のソーシャルワークの開拓者たちは、すでに家族集団に働きかけることの重要性を強調してきた。⁴⁾

しかし、長い間伝統的に維持されたこの考えが薄れ、ソーシャルワーカーが家族を対象とする専門性を認めることが次第に減少してきていることが指摘されている。

ウィットキン(Witkin, S.L.)によると、それには2つの理由があり、1つは他の専門職による家族援助実践が出現したこと、2つには民間による臨床的ソーシャルワークが展開されたことで、特に家族療法の発展に伴い、ソーシャルワーカーが治療的実践の志向に傾き、ソーシャルワーク本来の社会正義や社会問題へ介入が薄れてきたことを指摘している。⁵⁾

この過去40年間に互って、上記のような家族に焦点を当てた治療が心理学や精神医学の分野で新たな専門領域として発展したことは、家族ソーシャルワークにも大きな影響を与えたことは否めない。つまり、家族援助の重要な部分としての家族療法の発達、臨床的もしくは治療的な志向を持つソーシャルワーカーを惹きつけ、それにアイデンティティを持ち、支持していったのである。このことは、家族へのソーシャルワーク実践と家族療法や家族カウンセリングと言った専門との区別をぼやけさせる結果となったのである。こうした傾向への反応はさまざまであった。

あるものは個人治療や治療的ソーシャルワークの流行に対して本来のソーシャルワークの機能や

役割とは違うと批判や非難をし、あるいは、そうした傾向に対して支持する人たちもいた。中にはそれらに代わるものを提案する人たちもいた。⁶⁾

家族ソーシャルワークを心理療法や臨床的ソーシャルワークと区別する重要な点は、何と言っても、社会正義(Social Justice)を目標とし、基盤に人権擁護があり、さらに、地域を基盤とする実践であること、そして、家族を基盤とする実践モデルであることである。

こうした傾向の中で、例えばヌルマン(Nulman)はアドボケートとセラピストの役割の統合を強調しており、⁷⁾ ハートマンとレアード(Hartman&Laird)は家族ソーシャルワークのモデル開発にエコシステム理論を取り入れることを勧めている。⁸⁾ 以上のように家族ソーシャルワークの独自性と存在性を強調する試みがなされたが、次第に家族療法やセラピーに傾き、社会変革に対する介入への強調は比較的薄くなっていったことは否めない。

しかし、わが国のソーシャルワークの分野で、家族支援が注目されたのは最近のことであるのに対して、アメリカでは、すでに1970年代に家族をサポートする動きが始まり、1980年代から90年代にかけて数多くの家族をサポートする計画と実践がなされてきたのである。そうした家族サポートのプログラムの中で、個々の家族員を援助する直接サービスと、家族アドボカシーから成り立っていた。家族アドボカシーと言う概念はわが国では馴染みのない概念であるが、伊藤によると家族アドボカシーとは「ソーシャルワーカーが、クライアントの権利を擁護する者として、家族全体、あるいは家族成員の権利を妨げている制度や機関のあり方やサービスの内容を改善させていくために、クライアントとしての家族の権利と要求を主張・代弁・勧告していく活動」であると定義している。(伊藤富士江『第9章ソーシャルワークと家族支援』大島・佐々木編「社会福祉援助技術論」ミネルヴァ書房、1999、P.197)

上記のように、家族援助の機能の中で、家族のために、代弁し、権利を擁護する機能は重要であるという認識が強かったのである。本稿では、『アドボカシー』の日本語訳を用いず、そのまま、『アドボカシー』を用いることとした。

以上の状況のもとで、家族ソーシャルワーカーたちは、さまざまな家族形態、家族政策、社会機関や社会システムとの間の関係を理解しようと努め、真のソーシャルワーカーの機能と役割とは何かを模索してきたのであった。その為の、様々な理論を取り入れようとの動きが活発であったが、家族ソーシャルワークの独自性と目される「アドボカシー(Advocacy)」の機能がどのように変遷し受け継がれていったかを考察しよう。

第2章 ソーシャルワークにおけるアドボカシー機能とは

日本の文献を見る限り、これまでは、あまりソーシャルワークのアドボカシー機能について書かれた文献は多くはなかった。もちろん、社会福祉に限らず、法律、経済、政治の分野で人権擁護としての捉えかたは様々であるが、ソーシャルワークという専門職の一つの機能として位置付けられているものは、最近出版された、西尾と清水の編著による「社会福祉実践とアドボカシー」(2000年)⁹⁾や上記の伊藤などの著述以外にはあまり、見当たらなかった。わずかに、単発的に児童や障害者の人権問題として、取り上げられたり、福祉辞典(小松源助「ケースワークの基礎理論」1977)¹⁰⁾とかソーシャルワーク論(大塚他編「ソーシャル・ケースワーク論」1994)¹¹⁾の中で数行とか、1ページ位しか、記されていない。西尾・清水の著書以外では、同年3ヶ月早く出版された井垣章二著「児童虐待の家族と社会——児童問題にみる20世紀」の第7章に『チャイルド・アドボカシーと社会変革』¹²⁾と題して、アドボカシーの問題を扱っている力作が見られるだけである。

井垣はその著書で、アメリカにおける児童の権利擁護を中心に論じているが、アドボカシーのソーシャルワークにおける位置付けを調べる為に、『エンサイクロペディア・オブ・ソーシャルワーク』にどのように項目が挙げられているかを示唆している。と言うのは、挙げられているかどうかはその重要性の目安になるからだと言う。それによると、1965年や1971年には全然掲載されていない、1977年にやっと索引項目で挙げられ、1987年版には再び登場しているという。¹³⁾

先にもふれたように、ソーシャルワークはその発祥の時から、社会正義を求めて、社会変革のアドボカシー機能を有したと思われる。大変興味深いことに、1900年、教育者のシモン・パターン(Simon Pattern)が“Social Workers”という用語を造語し、それをフレンドリー・ビジターズやセツトルメント・ハウスの住人たちに適用したという。これが、現在の『ソーシャルワーカー』という専門職名の始まりであるが、このとき、シモンとメリーリッチモンドがソーシャルワーカーの中心的主要な役割は、アドボカシーなのか、それとも、個別化されたソーシャルサービスを提供することなのかと、大いに論じ合ったと記録されている。¹⁴⁾つまり、当時のソーシャルワークの機能としてアドボカシーが重要な意味を持っていたことが分かる。井垣が「遠くドロシー・デックスやジェーン・アダムスはこのアドボカシーとしての役割を果たした最たる人物であり、それはソーシャルワークの発祥以来の伝統であったはずだ。」¹⁵⁾と指摘しているように、まさに、クライアントが個人であれ、集団であれ、家族であれ、その福祉の為に社会のシステムを変革することに励むことはソーシャル・ワーカーの責務と考えられるのである。

確かに、アドボカシーの活動は1960年代の公民権運動や貧困戦争あるいは人種差別の問題などがきっかけで生まれ、福祉の分野でも重要な役割であったと考えられる。1969年頃から1970年にかけて、アドボカシーの活動は活発化したと思われる。特に家族を対象とする『家族アドボカシー』(すでに伊藤や井垣が言及しているように)に関して、アメリカ家族サービス協会(FSAA: Family Service Association of America)が率先してマニュアルを作り、全国の家族機関に配布し、具体的な手立てを勧めている。このように、アドボカシーは家族アドボカシーとしてFSAAのメンバーによって展開し受け継がれていくのであった。¹⁶⁾

国連の文書によると、「人権はソーシャルワーク理論や価値、倫理および実践とは不可分のものである。人間のニーズに関する権利を擁護し、育成するべきであり、正義とソーシャルアクションの具現化の動機となる。それゆえ、たとえ、生活が

保障されない国で、権利擁護がソーシャルワーク専門職にとって難しい結果をもたらすとも、そうした権利の擁護(アドボカシー)はソーシャルワークの統合された機能なのである」¹⁷⁾と述べているが、まさに、言うことは易しくとも、行うことは難しかったであろうと推察される。このように、ソーシャルワークの評論家達は「アドボカシーはソーシャルワークの中核となる重要な要素だ」と見なしたのであった。

ソーシャルワークにおけるアドボカシーの機能については、多くのひとがその重要性を認め、力説しているとアーサートンとブランドン (Kate Atherton, David Brandon) もアドボカシー機能に関する調査報告の中で指摘している。¹⁸⁾ 例えば、デイ (Day) は「ソーシャルワーカーは社会的弱者の擁護者である」¹⁹⁾ とし、ペイン (Payne) などは「アドボカシーがソーシャルワークの機能となる理由は、個々のクライアントの要求やニーズが適切に機関内で表されているかどうかを、代弁する、その役割にあるからだ」と述べている。しかし、このようにアドボカシーについて多種多様な論議がなされているにもかかわらず、ほとんどのソーシャルワークの文献にはあまり用語の説明はなされていないとアサートンらは指摘している。²⁰⁾ また、エゼル (Ezell, Mark) の行ったアメリカのソーシャルワーカーを対象とした調査研究によると、90%のワーカーは「自分達の仕事の一部にアドボカシー機能を持っている」と答えているが、フルタイムのアドボケートとして仕事に関わっているのは1%にも満たないと報告している。²¹⁾ では、いつの時期にアドボカシー機能が発揮されたのだろうか。

井垣は先の著書で、1960年代から1980年代までの資料に基づいて、アドボカシーの歩みを述べているので参照されたいが、70年代に盛んだったアドボカシー活動が80年代に入るといろいろな意味にとられて、例えば、行政機関におけるアドボカシー・システムは今日のケースマネジメントに似た面をもっているし、今日のオンブズマンもアドボケートの意味を持つと指摘している。²²⁾

クチンズ等 (Kutchins, H & Kutchins, S)²³⁾ やギルバートとスペクト (Gilbert, N. & Specht, S)²⁴⁾ によると、殆どすべてのソーシャルワーカー達は

この専門職が持つアドボカシー機能の長い歴史と社会改革に対する密接なかかわりを知っていたという。しかし、その活動は1960年代の貧困戦争がコミュニティの組織化とソーシャルアクションを進めてきた時期までであり、それが1970年代の後半に再び復活し、関心が戻ってきたと指摘している。

本稿では、その後90年代に入って、再びソーシャルワークのアドボカシー機能が取り上げられるようになったので、主に90年代の資料を中心に進めていきたい。

マンサー (Manser, Ellen) によると、アドボカシーは決して新しい概念ではなく、特に家族を対象に発達し、実践されたが、時代の流れに従って、その強調点は変化しているという。先にも述べたように特に1970年代に家族を援助する家族アドボカシー (家族擁護もしくは家族弁護) はアメリカ家族サービス協会 (FSAA, Family Service Association of America) の中心的課題として実施されてきた。²⁵⁾ そのFSAAの定義によると、家族アドボカシーは、第1に、人々の生活状態を改善するために計画された専門的サービスであること、第2に改善のために必要なら、コミュニティ改革が出来る技術を用い、行動をおこすべく、専門的な知識を利用すること、さらに、さまざまな組織や機関と家族が直接連携を取りながら、家族の利益の為に活動することを指している。²⁶⁾

以上はどちらかと言うとアドボカシーに関する活動を説明しているが、エゼル (Ezell, Mark) によると、共通に誰もが同意し、認められている定義はなく、それぞれが独自の定義づけをしていると指摘している。²⁷⁾ たとえば、ヘップワースとラースン (Hepworth & Larsen) は、3つの目的、すなわち、第1にクライアントが必要とするサービスや社会資源を受けるようにし、第2にクライアントにひどく影響を与えている現存の政策や手続きを変更し、第3にクライアントが必要としているサービスや資源を提供できる目的のために、政策や制度を新たに促進するようにクライアントと共に、あるいはクライアントの代わりに働くプロセスであるとアドボカシーを捉えている。²⁸⁾

さて、こうしたアドボカシーの機能と役割がど

表1 特殊なアドボカシー活動の頻度数

項目	殆ど常にある	頻度(%) 時どきある	全然ない
① クライアント自身の権利教育	63.1	30.2	6.7
② 機関内での良いサービスに関する議論	48.5	38.3	13.2
③ 問題解決のAD, スキルをCLと家族の教育	44.4	40.1	15.5
④ 機関内でのクライアントの権利の推進	33.3	44.6	22.4
⑤ 問題に関して社会(公共)の教育	32.2	48.2	19.6
⑥ 他の機関との調整交渉	26.0	39.7	34.2
⑦ 他の機関の働きを監視	19.0	32.6	48.3
⑧ 政策決定者への証言	13.2	47.7	39.0
⑨ 連携の組織化	10.6	34.1	55.3
⑩ 各政策策定者へのロビー活動(陳情活動)	10.0	43.6	46.4
⑪ 有権者の支持を得る活動	9.4	44.7	45.9
⑫ 訴訟や法的救済方法の要求	8.1	21.5	70.4
⑬ 問題の調査研究	7.5	26.2	66.3
⑭ 公聴会でのクライアント代理	7.3	34.8	57.9
⑮ 他機関の運営規則策定に影響	7.0	35.9	57.1
⑯ 政治運動	6.0	35.4	58.6
⑰ 問題に関する報道機関への影響	3.3	36.7	59.9

出典：エゼル：P.42

れほど、現在のソーシャルワーカーに認識されているのか。アドボカシー活動の内容とその範囲を経験的に知ることは大切である。そこで、1994年(エゼル)と1997年(アーサートンとブランドン)に行われた2つの調査研究を基に、実践の分野でどのように経験されているかを検討してみよう。

第3章 ソーシャルワーク実践とアドボカシー経験

I. エゼルの調査研究：(1994)

エゼルの研究はソーシャルワーカーのアドボカシー活動についての経験的情報を提供する為に行われた。そのために以下の項目についての質問が用意された。

- ① どれくらいの時間をソーシャルワーカーは仕事に関連するアドボカシーと、ボランティアとしてのアドボカシー活動に費やしているか。
- ② どのような種類のアドボカシーをするのか。
- ③ 何がアドボカシーに打ち込む度合いの要因となっているか。
- ④ なぜソーシャルワーカーはアドボカシーに携わるのか。

上記の要件とソーシャルワーカーがどれだけアドボカシーをするかに加え、何を実際にするのか、

どのような状況において、どのようなスキルが必要かなども、大切な調査要件である。

調査方法：

ワシントン州の無作為に選ばれた NASW (National Association of Social Workers：全米ソーシャルワーカー協会) のワシントン支部会員 500 名に、9 ページに亙る調査票を配布した。それは全体会員の約 25 % に該当する。また、偏りがないように、無作為に選ばれた 77 人の NASW メンバー以外のワシントン大学ソーシャルワーク学部 of 卒業生にも調査票を送付した。合計 353 部の使用可能な回答が回収された。

調査に用いられたアドボカシーの定義は以下の通りであった。：

「アドボカシー活動は、ある一定の決定、法律、政策や業務にクライアントやクライアント・グループに代って意図的に影響を与える努力をすることである。」

- ① ある一定のクライアントやクライアント・グループに代わって、アドボカシー活動をする。
- ② 介入の対象はクライアントではなく、機関やシステム(制度、体制)である。
- ③ 他のソーシャルワーカーの介入と同様にシステムの(計画的)な介入である。(問題の評価、計画、行動と結果評価が含まれる)。

表2 仕事および機関の機能として関連するアドボカシー活動の程度：
仕事関連のアドボカシーに従事する週における平均時間

		な し	5時間以内	5－10時間	11時間以上	合 計
アドボカシー活動は 公的勤務義務の一部である：						
① 賛成である	(%)	6	47.7	35.1	16.7	100.1 (174)
② どっちとも言えない	(%)	13.0	73.9	13.0	0.0	99.9 (23)
③ 賛成しない	(%)	40.4	57.9	1.8	0.0	100.1 (57)
計		10.6 (n=27)	52.4 (n=133)	25.6 (n=65)	11.4 (n=29)	100.1 (254)
クライアントのための アドボカシーは機関の第1の 機能の一つである：						
① 賛成である	(%)	2.3	39.8	33.0	25.0	100.1 (88)
② どっちとも言えない	(%)	10.8	48.6	37.8	2.7	99.9 (37)
③ 賛成しない	(%)	14.9	63.2	16.7	5.3	100.1 (114)
計		9.6 (n=23)	52.3 (n=125)	25.9 (n=62)	12.1 (n=29)	99.9 (239)

出典：エゼル：P.40

以上の定義に加えて、17 項目に互るアドボカシーの活動内容が表記されているが、その項目と調査結果による頻度数については表1を参照されたい。

[アドボカシーのタイプ]

また、アドボカシーにはいろいろなタイプがあるが、エゼルは調査のなかでつぎの3つのタイプを示している。① 個人のクライアントやクライアント・グループのために活動するケース・アドボカシー ② 同じような問題で苦しむクライアント集団のために活動するクラス・アドボカシー、および ③ ソーシャルワーカーが雇用されている機関内の変革を試みる内部アドボカシーである。

[調査対象者の属性]

性別では圧倒的に女性が多く74.8%で、白人、MSWの資格を所有、専門職経験が長く、平均して13年の実践経験を有し、直接援助（ケースワーク実践）経験が10.9年、管理者経験が7.1年で、殆どの対象者が公立もしくは民間の非営利団体機関（NPO）で、直接サービスの役割を担っている。結果と考察：

① アドボカシー活動に費やす時間

殆ど90%のソーシャルワーカーが、その仕事において、またはボランティアとしてのアドボカシー活動を行っていることが分かったが、多くの

ソーシャルワーカーは週5時間以下のアドボカシー活動を職場で（表2）、又週1時間以下のアドボカシーをボランティアとして行っている。

② アドボカシーのタイプ

職場では殆どケース・アドボカシーをし、ボランティアとしてはクラス・アドボカシーが多かった。アドボカシーによる介入の多くはケース対象のもので75%を占め、機関内のものであった。広い範囲での変革を求めるクラス・アドボカシーは25%とどちらかというとなかった。

③ 職務とボランティアとの関係

仕事の役割と地位によって、活動時間に違いが見られた。管理者やスーパーバイザーの方が、アドボカシーに費やす時間が長かった。またマクロ実践のソーシャルワーカーの方が、ミクロ実践のワーカーより多くの時間をクラス・アドボカシーに費やしていた。また、アドボカシーが機関（職場）の仕事の一部であり、ワーカーの職務の一部となっている所では、それ以外のワーカーに比べ、より多くのアドボカシー活動を行っているという結果であった。しかも、興味深いことは、ワーカーが仕事で費やすアドボカシー活動の時間と、ボランティアとして費やす時間には密接な関連があった。

④ アドボカシーの内容

[クライアントの権利教育] が一番多く、次に「クライアントが良いサービスを受けるように議

論する」が多かった。

⑤ アドボカシーを行う理由

43.3%が「自分の個人的価値観による」を選び、70%がこの理由を第1、第2、第3の主な理由として挙げている。しかし、これだけでは、ワーカーがアドボカシー活動をする唯一の要因とは決められない。この領域の研究を進める必要があり、ソーシャルワーカーの教育的、個人的、専門的性格の背景を調査する必要がある。

⑥ アドボカシー活動は誰の為に

50%近くが子どもや若者達が対象で、次にほぼ25%が低所得者のためと回答している。

以上、調査研究の概要を検討したが、この調査から分かることは、アメリカのソーシャルワーカーはかなり自分のワーカーとしての職務にアドボカシー機能を意識し、活動を行っていることである。しかし、調査対象地となった、ワシントン州はエゼルによると、政治的にもリベラルで、先進的であると言われている故に、アドボカシーを促進させる傾向が強いとも言える。

しかし、要はアドボカシー活動の時間や内容が問題なのではなく、どのようなアドボカシー技法がいかなる状況で効果的であるのか、さらに、単なるクライアントへのサービスの一部と、アドボカシー機能の明確な区別が必要であり、今後の研究が望まれる。

II. アーサートン等の調査研究（1997年）

アーサートンとブランドン（Atherton, Kate & Brndon, David）はエゼルの調査研究に引き続いて1996年1月にアドボカシーに関するアンケート用紙103票を両Chelmsford大学とAnglia Polytechnic大学のCambridgキャンパスに1994年の夏、ソーシャルワークのコースで学位を取った卒業生全員に送付した。この集団は少なくとも20ヶ月の実践を体験していた。送付したアンケートの回収は47票で、回答してこなかった対象の10人に同じ質問紙を用い、電話によるインタビューを行い、トータルで57票の回答が得られた。

研究は以下の見出しについて検討された。すなわち、次の通りである。

- ① 雇用 ② 仕事にアドボカシーが含まれる割合 ③ 機関内におけるアドボカシー活動

- ④ 機関外におけるアドボカシー ⑤ 関連する葛藤 ⑥ 他のアドボケートとの連携

- ⑦ 彼らの学位取得のコースがアドボカシー実践の為に用意された範囲

この調査ではあらかじめアドボカシーの定義を示さず、質問への回答からその意味を引きだした。

結果と考察

★ 調査対象者の雇用関係

サンプルの44人が地方行政に勤務、4人が民間のボランティアのセクターで、3人が裁判所の調査官で、6人は特定できなかった。児童養護の仕事が圧倒的に多く30人で、驚くべきことに、学習障害をもつ人々の為に働く割合が多かった。このことは、長年の入所生活から解放されたクライアント達が、ソーシャルワークのサポートを受け、地域を基盤とする設備を用いながら生活をするクライアントとの協働を反映している。精神病患者のためのワーカーが6人と少ないことは、今後将来のこの分野での仕事が減少していることを反映しているかもしれない。大多数がフィールドワークの場にいるが、施設やデイケアには比較的少ない。

★ アドボカシーが仕事に含まれる割合

17人が50%から75%であるとしている。30人が50%以下と答えている。

★ 雇用されている機関内のアドボカシー

この点については回答が難しく、雇用者のワーカーが機関の改善の為にアドボカシーが出来るものかどうか疑問視しているが、ケースのためにチーム・カンファレンスでクライアントの擁護、代弁ができるのではと指摘している。

★ 機関外でのアドボカシー

社会保障や住宅などの問題で、その関係の機関と連絡を取り、クライアントが妥当なサービスをうけているかどうかに関して話し合いをしたり、保証したり、電話で話したりしているが、個々のケースに関して話し合うのは難しいと答えている。

★ アドボカシーの役割葛藤

殆どのワーカーが葛藤を体験しているが、例えばサービスと予算との関係でままにならず、フラストレーションを起こしていると答えている。又、社会資源が不足していることや、予算問題、財源の問題など挙げている。

★ 他の擁護者たちとの交流とコンタクト

4 人が殆どコンタクトがないとしているが、49 人が情報提供している。とくに、公式には弁護士や CAB やオンブズマンとのコンタクトを持っていると報告している。更に家族アドボカシー、つまり、祖父母などを含む家族によるアドボカシーが有効であるとしている。その他仲間によるアドボカシーや市民によるアドボカシーが有効であると力説するものもあった。

★ ソーシャルワーク・コースの準備状況

アドボカシーの準備コースが大変役に立ったと大部分の回答者が報告している。このコースでアドボカシーの知識と訓練を受けた為、自信が出来たこと、それは学位を取得する以上のものである。しかし、実践となると、その訓練が不十分で、どう行ってもよく分からず、例えば、具体的な弁護士や裁判所との協働についての技術は不十分だったと批判している。

★以上の書かれたアンケートの回答とは別に、電話によるインタビューではどうであろうか。

インタビューを受けた 10 人の結果からは、研究者によると、主たるグループとの明確な違いが見られなかったとしている。10 人とも地方行政で現場実習をしている。

これまで見てきた調査研究は、エゼルの場合と異なり、新たにワーカーとなった経験の浅い実習生や勤務したての人たちであったが、どのような教育が必要かを知るには良いモデルであり、今後の社会福祉教育に資するものと思われる。

第4章 まとめと考察

エゼルとアーサートン等の研究をみると、かなり、アメリカのソーシャルワーカー達は「アドボカシー」機能が彼らの責務であり、仕事の一部と認識していることが分かった。しかし、1981 年にエプスタインがアドボカシーを主たる仕事にしているワーカー105名を対象に行った実態調査では、アドボカシーがワーカーの責務であると認めたワーカーは 25%にも満たず、77%のワーカーがアドボカシーからソーシャルアクションを除外していると報告している。²⁹⁾ これを、エゼルやアー

サートンの調査結果と比較すると、90 年代になって改めてアドボカシーの必要性和重要性が認められたと考えられる。井垣はエプスタインの結果からソーシャル・ワーカーのアドボカシーの社会変革機能が期待できなくなったと述べているが、³⁰⁾ 90 年代に入って、その重要性が再認識されたのである。

先に問題提起の中で述べたように、もともと、ソーシャルワークはアドボカシーの機能を持つべく発生したにも拘わらず、流れの中で曖昧にされてきたと言える。その点について、ローズ (Rose, Stephen) は強く次のように酷評している。

「ソーシャルワークはその起源から構造的矛盾をもっていた。この矛盾は、つぎの社会的事実から起こっている。というのは、ソーシャルワークが正統的専門職であると認める主体は政府であり、それによってソーシャルワーカーが専門職であると認められる合法性と、主な資金を資本主義国家から受けていると言う点で、皮肉なことに、その同じ基本的なシステムである資本主義国家がクライアントの貧困や虐待を生み出しているのである。ソーシャルワークという専門職はこの内的(本質的)矛盾を否定、無視するために、個人的欠陥を説明するモデル(パラダイム)を適合し、開発することで、その営み(業務)を導いてきたのである」³¹⁾

こうしたローズの非難はあるが、ソーシャルワーカーにとって、アドボカシーは重要な機能である。アーサートン等はこうしたアドボカシーの状況についてこう指摘している。「ある者はアドボカシーの言葉を広義で使い、クライアントに代わって行う内外の団体との全ての交渉をアドボカシーと呼んだり、様々な形式のアドボカシーがある。特に集散的(集团的)アドボカシーや市民アドボカシーに関するかなりの混乱がある。多くのソーシャルワーカーは対立の最も少ないソーシャルセキュリティで働き、他の者はもっとリスクの大きいところで経営方針に影響を与えたり、挑んでいる。「過剰」なアドボカシーは昇進のチャンスに害を与える可能性もある。」³²⁾とアドボカシーの実践の難しさを語っている。

ソーシャルワーカーにとって担わねばならない様々な役割、時にはカウンセラーであったり、行

政機関であったり、アドボケイトであったり、葛藤と緊張の多い状況に置かれていることは事実である。こうした中で、エゼルは政治活動とアドボカシーは必ずしも同じではないが、ソーシャルワーカーがこの積極的な傾向を育て、アドボカシー的介入の量と効果を増す努力をしなければならぬと示唆しているが、³³⁾ わが国においてもソーシャルワーク・アドボカシーを理解し、サポートするような道をソーシャルワーカー協会などを中心に模索し、検討する必要性を感じる。こうした、アドボカシー機能が、アメリカでは特にマクロ・ソーシャルワークとして、一つの専門技術として確立されていった過程は、次のPart IIに譲りたい。

注)

- 1) ロバート W, ロバーツ&ロバート、ニー共編、久保訳「ソーシャル・ケースワークの理論」川嶋書店、1985、P.V.
- 2) 田代不二男編訳「アメリカ社会福祉の発達」誠信書房、1974、P.108
- 3) 同上、P.114
- 4) Witkin, S. L. "Family Social Work: A Critical Constructionist Perspective", *Journal of Family Social Work*, Vol.1:No. 1, 1995, P.33
- 5) 同上、P.35
- 6) Newfield, N. "Family Social Work/Family Therapy: A Tweedledum/Tweedledee Distinction" *Journal of Family Social Work*, VOL 1; Number 1, 1995, P.48
- 7) Nulman, E. "Family therapy and advocacy: Directions for the future", *Social Work*, 28, 1983, P. 19-22
- 8) Hartman, A., & Laird, J. *Family-centered social work practice*, NY: Free Press, 1983
- 9) 西尾祐吾・清水隆則編著「社会福祉とアドボカシー——利用者の権利擁護のために」中央法規、2000、9月
- 10) 小松源助・山崎美貴子編『ケースワークの基礎知識』有斐閣ブックス、1977、P. 50
- 11) 大塚達雄・井垣章二他編著「ソーシャル・ケースワーク論」ミネルヴァ書房、1994、P 208
- 12) 井垣章二『第7章 チャイルド・アドボカシーと社会変革』「児童虐待の家族と社会——児童問題に見る20世紀」ミネルヴァ書房、2000年6月、P. 238
- 13) 同上、P. 238
- 14) Barker, Robert L. *Milestones* NASW Press, 1999, P. 9
- 15) 井垣章二、前掲書、P. 241
- 16) Manser, Ellen (ed.,) *Family Advocacy*, FSAA, 1973
- 17) United Nations, *Human Rights and Social Work*, Center for Human Rights, U.N., Geneva and New York, 1994, P. 5
- 18) Atherton, K. & Brandon, D. "Advocacy and Social Work: The practitioners' experience", *Care Plan*, vol.4.number 2, 1997, p.21
- 19) Day, Peter, *Communication in Social Work*, Pergamon Press, 1972, P. 92
- 20) 前掲書、Atherton & Brandon, P. 21
- 21) Ezell, Mark "Advocacy Practice of Social Workers", *Families in Society, The Journal of Contemporary Human Services*, Jan., 1994, P.36
- 22) 井垣章二、前掲書、P. 251-251
- 23) Kutchins, H., & Kutchins, S. "Advocacy and social work". In G.H. Weber & G. J. McCall (Eds.) *Social Science as advocates: Views from the applied professions*, Beverly Hills, CA. Sage Publications, 1978
- 24) Gilbert, N., & Specht, H. "Advocacy and professional ethics", *Social Work*, 21, 1975, pp.288-293
- 25) Manser, Ellen ed., *Family Advocacy: A manual for action*, Family Service Association of America, 1973, Introduction
- 26) 同上、P. 3
- 27) Ezell, 前掲書、P. 36
- 28) 同上、P. 37
- 29) Hepworth, D.H., & Larsen, J.A. "Direct socialwork practice: Theory and skills", Homewood, IL: Dorsey Press, 1986, P. 569
- 30) 井垣章二、前掲書、P. 252
- 31) Rose, Stephen "Advocacy/Empowerment: Approach to clinical practice for Social Work" *Journal of Sociology and Social Welfare*, vol 17, June, 1990, P.41-50
- 32) Atherton, 前掲書、P. 25
- 33) Ezell, 前掲書、P. 45

参考文献（引用以外のもの）

- 1) 河野正輝著「社会福祉の権利構造」有斐閣、1991
- 2) 福祉オンブズマン研究会「福祉オンブズマン——新しい時代の権利擁護」中央法規、2000
- 3) 野々山久也著「家族福祉の視点」ミネルヴァ書房、1992
- 4) 木原活信「J. アダムズの社会福祉実践思想の研究」川嶋書店、1998
- 5) 岡田藤太郎「社会福祉学汎論——ソーシャルポリシーとソーシャルワーク」相川書房、1998
- 6) Anderson, E.D. "Regarding Family Advocacy" *Marine Corps Gazette*, vol. 82, No. 8, 1998
- 7) Hall, L.L., "Family Advocacy Issues", *Chronic Mental Illness*, vol. 4, 1998
- 8) Koroloff, N.M. "The Life Cycle of Family Advocacy Organizations" *ADMINISTRATION IN SOCIAL WORK*, vol. 20, No. 4, 1996
- 9) Bardill, D.R. "Family Social Work: The Past and the Present", *Journal of Family Social Work*, vol.1, No. 3, 1996

- 10) Briggs, H. E., "Enhancing Family Advocacy Networks: An Analysis of the Role of Sponsoring", *Community Mental Health Journal*, Vol. 31, No. 4, 1995
- 11) Mnroe, P.A. "Family Policy Advocacy: Putting Knowledge to Work", *Family Relations*, vol. 44, No. 4, 1995
- 12) 大國美智子他「生活を支える権利擁護」中央法規、1999